

令和3(2021)年度 人文学部公開講座

人文学を楽しむ PART 4

令和3年度に実施された人文学部の公開講座「人文学を楽しむ PART 4」の概要を記す。

人文学部は毎年、市民を対象とした公開講座を行っているが、令和2年度はコロナウィルス感染症の影響で開催を断念せざるをえなかった。今年度は定員を30名とし、事前申込制として5回、実施した。30名という定員は、数名程度の超過があっても問題なく実施できるよう、余裕を見て設定した。会場は例年通り、相愛大学本町学舎 F 604 教室である。午後2時から午後4時までというのも従来同様である。毎回、定員の80パーセント以上の来場者があった。

はじめに日程、題目および担当者の一覧を示し、そのあとに講座担当者による要旨を示す。なお、要旨は、内容・書式などそれぞれの担当者の意向に従い、全体としては不統一になっているところもある。

第1回 6月5日(土)

「春の曙・冬の月-『枕草子』と『徒然草』」

教授 千葉 真也 来場者 32名

第2回 7月10日(土)

「多文化共生のあり方を考える」

准教授 沼田 潤 来場者 27名

第3回 10月23日(土)

「アメリカに見る価値観の変化」

講師 アルスドルフ ヨハン 来場者 24名
※9月18日の予定であったが、台風接近のため日程を変更した。

第4回 11月20日(土)

「心理学が伝えたいこと」

准教授 西迫 成一郎 来場者 34名
第5回 2022年2月5日(土)

「小説と挿絵の織り成す世界」

准教授 荒井 真理亜 来場者 24名

第1回 6月5日(土)

「春の曙・冬の月-『枕草子』と『徒然草』」

教授 千葉真也

相愛大学に「春曙文庫」というコレクションがある。相愛女子短期大学国文科の重鎮であり、相愛大学人文学部開設時の日本文化学科の中心であった田中重太郎氏の旧蔵書を母体としている。『枕草子』研究の第一人者であった田中重太郎氏の蔵書を中核する春曙文庫は、『枕草子』とその関連資料については日本屈指のコレクションである。

今回は春曙文庫の顕彰を第一の目的とし、さらに『枕草子』と『徒然草』の共通点を述べた。要点をあげると次のようになる。

①春曙文庫所蔵の『枕草子』写本の一部、『枕草子』三巻本を代表する善本の一つである彌富破摩雄旧蔵本、堺本系統の写本である朽木文庫旧蔵本を、画像とともに紹介した。

②春曙文庫所蔵の清少納言肖像などを紹介した。後代の画家の想像の産物であるが、各社の国語便覧やテレビ放送などで頻繁に登場するものである。

③『枕草子』第一段は「春はあけぼの」から「冬はつとめて」まで清少納言が着目した四季の風物を記述する。その最初に取り上げられる「あけぼの」が清少納言によって発見された自然美であることを辞書の記述と、勅撰集における用例数の変化によって説明した。次いで、同様に四季の景物を取り上げた『徒然草』第十九段を取り上げ、兼好法師が清少納言を十分に意識し、清少納言の筆に習うように、世人の注目

しない「冬の月」などを取り上げていることを述べた。これも「あけぼの」と同じように勅撰集の用例数の変化を示した。

第2回 7月10日(土)

「多文化共生のあり方を考える」

准教授 沼田 潤

「多文化共生のあり方を考える」というタイトルで、心理学や社会学、政治哲学の研究成果をふまえて、学際的な観点から多文化共生のあり方に関するレクチャーを行った。

カテゴリーを用いて自己と他者を区別し、そのカテゴリーに含まれる人はみな同じ特徴を有しているかのように捉えるステレオタイプの理解と、自己への肯定的評価・他者への否定的評価を通して、差別や排除を正当化するレイシズムが生じると考えられる。

レイシズムに抗するために、互いに相手と、自分とは異なる独自の観点を持った自律的人格として尊重しあう共生の作法という考え方を基にした、一人ひとりの唯一性を理解することの重要性を指摘した。さらに、人間は生の脆弱性という条件を抱えているため、その脆さをケアする他者の存在が必要であるという議論をふまえ、他者の問題を自らに引きつけて、他者のニーズに応じていく共生の技法という考え方を基にした、他者との応答的な関係性を構築することが肝要であると述べた。

最後に、共生の作法と技法の観点から、現代社会を批判的に捉え、多文化社会のあり方を探っていくことの重要性を指摘した。

第3回 10月23日(土)

「アメリカに見る価値観の変化」

講師 アルスドルフ ヨハン

近年、アメリカでは Christmas tree のこと

を、キリスト教徒でない人に配慮するために holiday tree という言葉に変えようという動きが出ており、物議を醸している。また、動画配信サービスの HBO 他が人種差別を理由に『風と共に去りぬ』の配信停止を発表した。作品の中で奴隷が不満を言わずに生活し、奴隷所有者が英雄のように描かれているというのが理由のようだ。ALSC (児童図書館サービス部会) は『大草原の小さな家』の作者、ローラ・インガルス・ワイルダーの名前を児童文学賞のリストから外すと発表した。ALSC によると、「作品の中に差別的な感情が含まれている」ことが理由であるという。似たような理由から、様々な歴史的人物の像も撤去されはじめている。過去の人物を現代の基準で裁くことは、愚かな行為と言えよう。歴史そのものを否定しかねない、危険な行為でもある。

本講座は「アメリカに見る価値観の変化」と題したが、一番ポイントとしたのは上記で例をあげた「ポリコレ」という概念である。「ポリコレ」というのは political correctness のことで、英語では略して PC ともいう。言葉のルーツに関しては諸説あるが、もともとはマルキシズムの中で、体制に反する言動に対して使用される言葉であったようだ。political correctness を直訳すると「政治的な正しさ」という意味になるが、あまりに広範囲にわたって使用される概念であるため、端的に定義付けすることは困難である。

ここで重要なのが多文化主義と political correctness はグローバル化や SDGs に伴って、マイノリティー (人種、ジェンダーを含む) の問題を考える際のキーワードとなったことである。すなわち本来 political correctness とは社会的弱者やマイノリティーに不快感や不利益を与えぬようにという善意から生まれたものだが、

「度を過ぎたポリコレ文化」に警鐘を鳴らす人も少なくない。ポリコレ文化の蔓延によって、今のアメリカの若者はむしろ過剰に保護され“心の免疫力”が低いまま成長し、心と知性が弱体化しつつある。(J. ハイト、G. ルキアノフ)

本講座では様々な事例を見ながら、現代のアメリカがどのように変化しつつあるのか、そして人々がポリコレ文化とどう向き合っているのか紹介した。

第4回 11月20日(土)

「心理学が伝えたいこと」

准教授 西迫成一郎

本講座は、われわれが生きていく上で生じる対人関係上の問題の一部が、認知のバイアス(歪み)によって生じている可能性を指摘し、より良い対人関係の構築に資することを目的とした講座であった。

多くの人にとって、人との親しい関係は人生の喜びと結びつくだろう。しかし、人間の持つ認知傾向が、時に他者に対する思い込みを生じさせて問題を生むこともある。特にネガティブな内容を持つ他者への思い込みは、対人関係上の大きな問題につながるであろう。本公開講座では、対人認知上の歪みの例やその原因について解説した。

具体的な内容としては、ステレオタイプの認知、血液型性格判断、行為者-観察者バイアスなどについて説明し、これらの傾向を人が持つ原因についても言及した。また、人が行う認知の一般的傾向として、人は自分の考えに合致した証拠を探し反証する証拠はさがさない傾向があるという確証バイアスにも触れ、これと対人認知上のバイアスとの関連についても考察した。

以上の講座によって、人生上最重要視されることの1つである対人関係について受講者の理解を深め、実際の対人関係に寄与することができることを意図した。

第5回 2022年2月5日(土)

「小説と挿絵の織り成す世界」

准教授 荒井真理亜

日本の近代における文学と美術の協働について、新聞小説と挿絵の関係を例に解説した。

新聞を読む場合、私たちは文字だけを見ているのではない。新聞には絵や写真がある。つまり、言葉による言語のイメージと絵や写真などによる視覚のイメージをあわせて読んでいるのである。ところが、新聞連載小説が書物に収録される際、小説とともにあった挿絵はカットされてしまうことが多い。

しかし、初出で読むとどのような世界が見えてくるのだろうか。1912年に『大阪毎日新聞』で連載された柳川春葉の「生さぬ仲」は、鱈崎英朋が挿絵を担当し、好評を博した。さらに芝居化されて、ブームを巻き起こす。その後を受けて、1913年に同紙で連載が開始されたのが、菊池幽芳の「百合子」である。「生さぬ仲」と「百合子」の人気には共通点がある。小説・挿絵・芝居をセットで宣伝する新聞社の戦略である。「百合子」については、拙稿「菊池幽芳「百合子」の展開-小説・挿絵・芝居」(『人文科学研究』2019.3)ですでに論じたが、今回はそこで取り上げなかった挿絵を紹介した。小説と挿絵のコラボレーションによる機能や効果を考察し、小説と挿絵を一つの作品として解釈を試みた。

2021年度 相愛大学人文学部公開講座

人文学を楽しむ Part4

昨年度は、開催を断念いたしました公開講座、今年度は感染症対策に留意しつつ、開催いたします。

テーマは「人文学を楽しむ」。本学の教員が専門分野の話をご存分に語ります。

人文学の広がりとお楽しみください。ご来場を心よりお待ちしております。

6月5日(土)

春の曙・冬の月
—「枕草子」と「徒然草」—



教授 千葉 真也

7月10日(土)

多文化共生の
あり方を考える



准教授 沼田 潤

9月18日(土)

アメリカに見る
価値観の変化



講師 アルスドルフ ヨハン

11月20日(土)

心理学が伝えたいこと



准教授 西迫 成一郎

2022年 2月5日(土)

小説と
挿絵が織り成す世界



准教授 荒井 真理亜

開催日時

土曜日 14時~16時
(13時40分より受付開始)

開催場所

相愛大学 本町学舎
F604教室

Osaka Metro御堂筋線「本町」駅
C階段④出口より徒歩約5分

定員 30名(事前申込制)

※定員になり次第、
締め切らせていただきます。

受講料

無料

申込方法

今年度から、お申込みが必要に
なりました。本学ホームページより
お申込みください。



※4回以上ご出席の方には最終回に修了証をお渡しいたします。

※講師の都合、また新型コロナウイルス感染症対策のため、開催及び内容が変更となる場合がございます。あらかじめ、ご了承ください。

※授業の妨げとなる行為をされた場合、ご退室いただくことがあります。 ※受講時には、マスク着用、手指消毒にご協力をお願いします。

※咳や発熱などの風邪症状、体調がすぐれない方は、参加をご遠慮ください。

※お申込み時にご記入いただいた個人情報、個人情報保護法に則り厳重に保管し、目的以外の使用はいたしません。

お問い合わせ先

相愛大学人文学部人文学科合同研究室(平日9時00分~17時00分)

〒559-0033 大阪市住之江区南港中4-4-1 TEL:06-6612-6252 E-mail:jinbungakubu@soai.ac.jp



主催:相愛大学人文学部 後援:相愛大学総合研究センター

相愛大学研究助成報告

相愛大学研究助成 重点研究 A

人間発達学部子ども発達学科 松島 京

【研究課題】

保育実習における保育現場と保育者養成校との協働のあり方に関する研究

【研究期間】

2017年～2020年

【研究組織】

中西利恵、松島京、直島正樹、曲田映世、中井清津子

1. 研究の目的

実習および実習指導の充実化は、指針や要領の改定・改訂で求められている教育の質の確保と向上をめざすための最重要課題の一つである。充実化において、養成校と現場（実習施設）のどちらか一方の責任ではなく、両者の実質的かつ効果的な連携・協働の検討が求められる。本研究グループでは、保育現場と養成校が単なる実習先としての連携ではなく、緊密かつ実質的に連携するにあたっての保育現場と養成校双方の実習担当者が共有かつ活用できる教育方法を模索してきた。

そこで本研究では、養成校と現場双方の実習担当者が共有かつ活用できる教育方法の提案をめざす。具体的には、現場の実習指導者が抱える課題の明確化と、保育者養成校と現場の双方の実習担当者が共有かつ活用できる教育方法について、大阪府社会福祉協議会保育部会等の協力を得、大阪府下保育所および認定こども園における実習にかかる実践と調査を通して検討す

る。そして、保育者養成において、養成校と保育現場の双方にとって実習指導の専門性の向上につながる教育方法を提案することを目的とする。

2. 研究目標の達成を目指して実施した主な研究と成果の概要

1) 保育者養成における実習指導の現状と課題の整理

保育士資格と他の資格・免許の実習実施関連の基準等について整理をした。その結果、保育士資格は他資格に比べ、細かく定めている項目はあまり見られなかった。このような実態から、現場との具体的な協働方法の検討が必要であることがわかった。また、「保育実習指導」をメインとした研修会の実施状況についても整理をした。

この結果からは、①これまで「主任保育士研修」等の一部や地域独自の取り組みとして行われてきたこと、②大阪府では30年以上にわたって実習をテーマに研究懇談会を実施していること、③2017年よりスタートした「保育士等を対象としたキャリアアップ研修」の研修分野として「実習指導」関連は組み込まれていないこと、④「実習」実施において養成校と保育現場との連携・協働の必要性、また連携・協働において「実習」の重要性は把握されていること、⑤一方で、養成・育成の実際として「実習指導」の質の向上への組織的・体系的な取り組みの難しさも見えること、⑥「保育実習指導のミニマムスタンダード」の活用や、地域の実情に即した実習ガイドラインの作成の必要性がうかがえること、などが明らかになった。

2) 新しい実習評価票の導入と、実習の現状把握 (1)

全国保育士養成協議会 (2018) が示す新しい実習評価票 (『保育実習指導のミニマムスタンダード ver.2』) を用いて、それに関する質問紙調査を実施した。本評価票を用いて実習評価を行った実習指導担当者の意見を集めることにより、実習の現状について具体的に把握を試みた。回収率は75% (配布数45、回答数34) である。

「評価の観点としてわかりやすかった評価内容 (複数回答可)」は、多い順に「意欲・態度」「責任感」「探求心」であった。「評価の観点としてわかりにくかった評価内容 (複数回答可)」は、多い順に「専門職としての保育士の役割と職業倫理」「保育内容・保育環境」「保育所等の機能と役割」であった。自由記述からは「評価の観点が具体的でわかりやすい」という意見もある一方、「この基準では学生が理解できているか評価するのは難しい」という意見も見られた。項目によって、評価の基準がわかりやすいものとわかりづらいものとに分かれる傾向にあることがうかがえる。また「この評価段階では評価が難しい」という意見もいくつか見られた。

3) 新しい実習評価票の導入と、実習の現状把握 (2)

実習担当者の意見として上記2) のような傾向の一般性について検討するため、2019年度の「保育所実習」の実習指導担当保育士を対象に再度調査を実施し、2018年度の調査結果と比較することとした。なお、質問調査用紙の質問内容は昨年度と同様のものであるが、実習評価票については、評価の内容とその評価上の観点に関する実習体験や評価のポイント例がわかりやすいよう、表示方法を改善した。調査の結

果、評価の観点について、2019年度は昨年度と同様「意欲・積極性」「責任感」(態度) はわかりやすく、「専門職としての保育士の役割と職業倫理」「保育所等の役割と機能」(知識・技能) がわかりにくかったようである。今回は、評価上の観点に関する実習体験や評価のポイント例がわかりやすいように実習評価票の表示方法を改善しているが、同様の傾向を示していた。自由記述もふまえれば、知識・技能の観点は実習生の理解度に基づくものであり、実習生の内面的成長に関わるものでもあるため、10日間の実習では把握しきれないと捉えられていると考えられる。このような結果から、保育士の専門性の向上を目指す実習において養成校と現場との協働のあり方の一つとして、養成校と現場が協議しながら、実習生の育ちを共有できる適切な評価票を作成し検討・試行することが課題であると考えられる。

4) 学生がより主体的に取り組む実習にむけて

上記3) の実習指導担当者の「わかりにくい」の改善を課題とすると共に、『保育実習の効果的な実施方法に関する調査研究 (全国保育士養成協議会 2017)』で示されている「保育実習の標準的・効果実施方法に必要な要素」のひとつである「学生がより主体的に取り組む実習」とするため、あらたな教育方法の導入と、その検証をめざすこととした。具体的には、調査結果から、特に「わかりづらい」という回答が多かった「専門職としての保育士の役割と職業倫理」を対象に、学生の理解度が現場の実習指導担当者に把握しやすいよう、2020年度の「保育所実習」の実習記録を改訂した。そして、記述された内容を確認するとともに、改訂された実習記録を使用した実習生 (2020年度「保育所実習」を終えた学生) を対象に、グループ

インタビュー調査を行った。その結果、これまで使用していた実習記録と評価票からでは、学生の「保護者支援」や「職員間連携」等の業務に関する理解面を十分に捉えることが難しかったが、改訂した実習記録からは学生が理解しようとしている姿が浮かび上がってきた。さらに、事前指導で評価の観点を示したことや、記録用紙そのものに「具体的に書くべき事項を明示した」ことで、学生が主体的に保育者に質問をしやすくなったのではないかと考えられる。また、実習記録の改訂により、実習担当者が具体的な指導をしやすくなり、学生も学びが深まったのではないかと考えられる。

3. 研究内容・成果の公表

①「保育者養成校と現場が協働して行う実習を

目指して」日本保育者養成教育学会第1回大会（2017年3月）

②「保育者養成校と現場が協働して行う実習を目指して（2）」日本保育者養成教育学会第2回大会（2018年3月）

③「保育者養成校と現場が協働して行う実習を目指して（3）」日本保育者養成教育学会第3回大会（2019年3月）

④「保育者養成校と現場が協働して行う実習を目指して（4）」日本保育者養成教育学会第4回大会（2020年3月）

⑤「保育者養成校と現場が協働して行う実習を目指して（5）」日本保育者養成教育学会第5回大会（2021年3月）

特別演奏会助成公演

学内発表会

E. フンパーディンク作曲《ヘンゼルとグレーテル》ハイライト 演奏会形式

学内オペラ公演

E. フンパーディンク作曲《ヘンゼルとグレーテル》全3幕

研究代表者 泉 貴子（音楽学部教授）

共同研究者 岡坊久美子（音楽学部教授）

1. 研究目的

大学教育機関におけるオペラ公演《ヘンゼルとグレーテル》の考察、その実演がもたらす教育的効果とオペラ普及に与える影響

2. 日時

2021年2月20日(土)開演 15:30 学内発表

2021年3月15日(月)開演 15:00 学内公演

3. 会場

相愛大学南港ホール

4. 来場者数

144名（大学関係者のみに限定）

5. ■出演者

奥村哲也（指揮・教員）、高岸未朝（演出・教員）

桂実玖、和田芽衣、西村未来、切通佳奈、成川奈央、三木彩乃、御厨円香、

肖錦東、田中里奈、吉川瑠々、川本公弥（以上学部生、専攻科生、大学院生）

萬田一樹（教員）

相愛大学ヘンゼルとグレーテル合唱団

（音楽学部声楽専攻学生・相愛高校音楽科声楽専攻学生有志）

相愛大学ヘンゼルとグレーテルオーケストラ（音楽研究科学生・音楽学部管弦打専攻学生有志・卒業生）

小椋由美子（ピアノ・教員）

中川日出鷹（賛助）

■スタッフ・協力

〈音楽指導〉岡坊久美子、泉貴子、片桐直樹、萬田一樹

〈コレペティトゥア〉小椋由美子、碓理早

〈稽古ピアノ〉玉城葵

〈舞台監督〉田中敬子 〈舞台スタッフ〉青木一雄、曾根麻里名

〈演出スタッフ〉志水祐子

〈制作指導〉志村聖子

〈映像・照明学生スタッフ〉岡室穂乃花、神崎葉月、西田彩香、小川璃久

中川悠、堀田貴史、和氣彩乃

〈字幕スタッフ〉玉城葵、桑原颯希 〈チラシデザイン〉永井秀一朗 〈ライブラリアン〉

藤原昌太郎

〈事務〉畑田真莉子 〈映像協力〉柏木昌生

〈大道具・小道具協力〉加古川シティオペラ、公益社団法人関西二期会

〈衣装協力〉東京衣裳株式会社

6. 公演について

これまで本学の声楽主要科目としてオペラを取り入れてきたのは、声楽を学び歌手として成長していく過程で、身体的に成長期を経て成熟していくデリケートな時期における、声種や正しいレパートリーの確立を目指すこと、そして演劇技術の研鑽、協調性等を総合芸術であるオペラを体験することで、総括的に学ぶことがで

きるからである。その中で長年公演をしてきた W. A. モーツァルトの作品から離れ、様々な面で難易度の高い作品《ヘンゼルとグレーテル》を上演した。ドイツ・ロマン派の円熟期の潮流に乗り、オーケストレーションの充実、高度な歌唱技術が求められるこの作品を取り上げることにより、学生のドイツ語による歌唱技術の向上、作品の特性を失わない工夫がされたオーケストラの編成縮小によって、「ドイツオペラ」というものを体感することが出来、学生に習得させることができた。また大学のホールで上演可能な演出効果（舞台装置の可能性）といった点に焦点を置き、学内ホールで公演する意義、効果の検証を行った。

そして学内公演の1か月前には下級生から選抜された学生も加え、ハイライトを演奏会形式（ピアノ伴奏）で行った。例年下級生は合唱として学内オペラ公演に出演しているが、今回は早くからキャストとして経験することによって「演じながら歌う」ということの研鑽を実際の舞台上で積むことができた。それにより、実技試験やコンサートでの独唱時における緊張のコントロール、演奏表現が更に豊かになり、歌唱技術も高めることが出来た。

今回新型コロナウイルス感染拡大の波が数か月ごとにやってきたため、多くの稽古時間がキャンセルとなり、演出家による立ち稽古をリモートで実施するという新しい試みにも踏み切った。また今では日本のオペラ界においては当たり前前の風景となったが、稽古場を土足厳禁とし、床の消毒液の散布やビニール手袋の着用、小道具等のこまめな消毒など徹底的な感染予防対策を行った。そして当日本番も不織布マスク着用の歌唱、オーケストラと舞台を遮るアクリルパネルの設置という異例な本番となった。こうしたことは本来では経験することのない煩わ

しさによって、歌唱を困難にしたであろうと感じるが、その中でもオペラの舞台上で演じ、歌うことができる喜びは格別のものであったように見受けられる。来場者の制限も設け、対象を大学関係者のみにしたにも関わらず、当初予想していた125名程度を大きく上回り、144名の来場者に聴いていただくことができたのもその理由の一つであろう。

出演した学生の中には、卒業後更に本格的にオペラの研鑽を積む希望を持つ者や、大学院進学を考える学生も出てきた。このことは若い世代の“舞台を創る”という意識が高められたことではないかと考える。

現代では急速なテクノロジーの進化によって、インターネット上には身近に音楽があり、いつでもどこでも音楽や映像を“入手”できる時代になった。しかしそれは字のごとく手元の携帯電話等機器に取り入れるだけであって、生演奏から得られる“体感”を手にすることはできない。音楽は機器を通して聴くものとなり、“生の”演奏に触れあうことがなくなってきているようである。身近に溢れているからこそ、当たり前になってしまい、遠のいていっているものがあるように感じる。オペラを体験した学生には、ほんの一瞬であれ、舞台上で体感したオーケストラの音の圧力、自分の声の響きによって感じられるホールの距離感、そういったものが体の中に記憶として残り、これまで機器を通して聴いていた音楽とは異なることに気づいてほしいと心から願っている。

